ハンガリーの議会選挙（６３９号）

２０２６年　3月　石館

ハンガリーで実施される議会選挙の投開票は４月１２日に行われる。この議会選挙は世界の注目を浴びている。最近になってスロバキア、ルーマニア、ポーランドなどの議会選が行われ、親 EU の政権になるか、反 EU の政権になるか注目を浴びてきたが、今度のハンガリー議会選は EU にとっても重大な選挙戦になる。

ハンガリーの現首相のオルバン氏は連続４期、１６年にわたり首相を務めてきた。過去４回の選挙では圧倒的な勝利で首相の座は盤石だと見られてきた。

小生はハンガリーとは長い付き合いでこの国に深い思い入れがあり今までも何回かレジメを書いてきた。

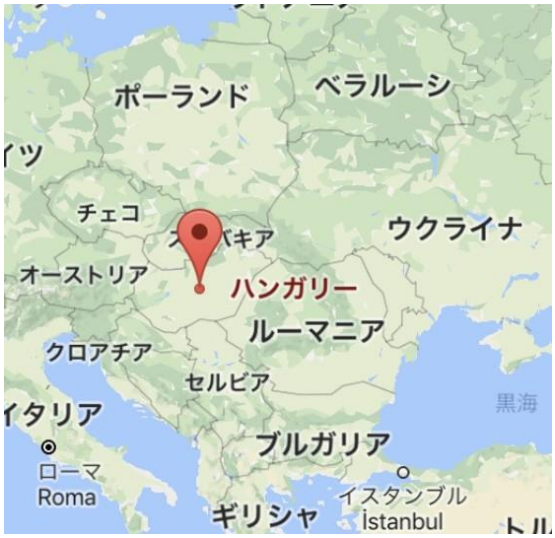
初めてハンガリーに入ったのは１９７６年であるが、その当時はソ連邦に属する共産主義国家であった。

１９５６年のハンガリー動乱という悲劇があったが、小生がハンガリーに入ったのは動乱の２０年後であったがまだ生々しい傷跡が残っていた。その後他の東欧諸国に比べ、比較的早い時期から西側の新しい技術を取り入れ、経済の自由化を徐々に進めてきた。

１９８０年代に入ってから、ハンガリーの自由化の動きは加速され、その流れの中でトーメンは世銀と組んで、西側との合弁会社を他商社に先駆けて検討を始めた。小生は１９８６年頃から再三ハンガリー入りし家畜の飼料と防寒断熱材の事業化について検討書を作成した。

当時はまだ、ココム規制があり、冷戦時代に西側諸国が共産圏諸国への軍事利用可能な技術や物資の輸出を制限するためのものであった。

合弁会社の設備は日本のメーカーのものであり、その中には先端的なコンピューターが組み込まれており、これらをココム規制の中で許可を取るのが至難の業で足しげく通産省に許可を求めて通ったのが思い出される。



ハンガリー側の様々な許可を取るのも大変で、その過程においてハンガリーの首相や多くの閣僚と親しくなり、ハンガリーの産業の自由化について政府の顧問のような形で意見を聞かれることが多くなった。

１９８９年東西ドイツを分断していたベルリンの壁が崩壊し、そのきっかけを作ったのは、ハンガリーの若き首相ネーメトであった。

ネーメトは１９８８年４３歳で首相になり、１９９０年５月まで首相を務めた。中東欧諸国では共産主義政権の崩壊が相次いだ東欧革命の激動の時代に、ハンガリー社会主義労働党の指導者として、そしてハンガリーの共産主義政権の最後の首相として、ハンガリー民主化運動にかかわった。

ネーメトが１９８９年に来日したときは、小生のそれまでのハンガリーとの関りから日本側の歓迎委員の一人として彼の面倒を見たこともあり親しくなった
左側がネーメト首相

残念ながらネーメトは１９９０年の選挙で破れ首相を辞任したが、首相をやるくらいなので当然であるがなかなかの人物であった。

０８年の世界金融危機でハンガリーは深刻な危機に陥った。多くの国民が低金利の外貨建て住宅ローンを組んでおり、通貨フォリント暴落で借金が膨れ上がる悲劇に見舞われた。IMF から緊急融資を受ける引き換えに年金削減や増税

の痛みを強いられた。オルバン氏は世界金融危機を“行き過ぎた資本主義と西側資本の失敗”と攻撃。“外国の銀行や多国籍企業に頼るのでなく、ハンガリー独自の道を行く”というポピュリズム的メッセージで２０１０年の総選挙に圧勝。憲法改正、メディア支配、司法の独立の形骸化で一強体制を築きあげた。

ドナウ川と国会議事堂

しかし今、１６年続いたオルバン体制のひずみが噴き出してきており、欧州内でも高インフレ率に苦しむ。法の支配問題でEU補助金が停止され、国民生活を直撃する。一方“保守リベラル”“批判的な欧州統合推進派”マジャル氏は国民の団結と政治的責任を強調し、ユーロ導入や法の支配の回復を唱える。

ハンガリーのロシア産エネルギー依存は他のEU諸国が脱ロシアを進める中で高止まりする。ロシアがウクライナに全面侵攻する前のロシア産天然ガスの依存度は５７％だったが、２４～２５年には７０％に上昇。国内消費が減る中でロシアからの輸入量を維持・拡大したためだ。

ロシア原油への依存度もウクライナ侵攻前の６１％から２４～２６年に８６％に上昇。原子力発電のロシア依存度も５０％から将来７０％に上昇する見通しだ。原子力はハンガリーの電力供給の柱であり、ロシアの技術と燃料に完全に依存している。

ロシアの空爆でウクライナに敷設されたロシア産原油のパイプラインが損傷。これによりハンガリーへの供給が中断し、オルバン政権は“ロシアへのエネルギー依存”という戦略的選択のリスクに直面。“ウクライナがハンガリーへの原油供給を妨害している”と批判している。EUのウクライナ支援で今までオルバンは拒否権を行使して妨害してきたので、その仕返しとしてウクライナはパイプラインの修理を意図的に遅らせているのかもしれない。

小生はオルバン体制になってからのハンガリーに行ったことはないが、今のハンガリーに対し、昔のようにこの国を何とか助けたいという情熱は、年を取ったせいもあるが、湧いてこない。ロシアは対 EU 工作の橋頭保であるオルバン体制のハンガリーを何とか継続させたいと必死になっていると思うし、選挙にも介入している。

勿論オルバンもこの選挙で負けると、ルーマニア革命の時の大統領夫妻が銃殺されたようなことにはならないと思うが民衆の今までの強権体質に対する強い反発で何が起きるか分からない。

オルバンとトランプ

今回の議会選はトランプ米大統領や欧州右派勢力など“自国第一主義”を掲げる政治勢力と、多元主義を重視する EU 主流派との価値観を巡る“代理戦争”の側面もある。

オルバンは欧米の反リベラル勢力からの支援に望みをつなぐ。トランプ氏やロシアのプーチン大統領、中国の習近平国家主席と“強い指導者”という価値観を共有し、緊密な関係を持つ。

トランプ政権は２５年末に公表した国家安全保障戦略で、急激な移民流入や国民のアイデンティティの喪失によって“欧州は文明的な消滅の危機に瀕している”と主張。米国が欧州の愛国者勢力に働きかけて方向性を変える必要があると訴えた。その欧州の連携相手と目するのがオルバン氏だ。トランプはかねてオルバン氏を“偉大な指導者”と持ち上げてきた。

EU の政策決定は全会一致が原則であり、過去ウクライナ支援をはじめ、様々な政策でオルバンの拒否権で前に進まなくなったことが多く、決議は多数決にしたらどうかとの意見も出ている。トランプがオルバンを支援していると言っても、さほど影響力が無いと思うが、ロシアの偽情報によるオルバン支援のキャンペーンは油断が出来ない。

世論調査によると、現状ではかってのように圧勝する公算は小さい。このためオルバンが大統領制への移行を決断する可能性もある。たとえ4月の選挙で敗北したとしても、オルバンが大統領に就任すれば、EUとの対立を長年続けてきた外交方針をマジャル氏が転換するのを妨げることが出来る。しかしこのような動きは民意に反していると国民の強い反対にあうだろう。